

Title	情報化の可能性
Author(s)	小泉, 潤二
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2007, 8, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70240
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

巻 頭 言

情報化の可能性

大阪大学 理事・副学長
教育・情報室長 附属図書館長
小泉 潤二

8月26日付で、上記の任務に就くことになりました。大阪大学における広義の「情報」について担当しますので、情報と私との関わりについて一言述べさせていただきますと思います。

現在人間科学研究科に所属する私が「情報」というものを最初に意識したのは1960年代後半の大学時代、梅棹忠夫氏の「知的生産の技術」に出会ったときでした。当時のベストセラー、その後のロングセラーとなったこの本は、コンピュータなど使うことなど考えられなかった時代に、情報の整理と利用について日本全体に大きな影響を与えました。私自身も、いわゆる「京大式カード」による資料整理やファイリングの方法をはじめ、情報の扱い方についてずいぶん影響を受けました。

しかし、情報について革命的ともいってよいほどのインパクトを受けたのは、大学院時代の1975年にスタンフォード大学に留学し、その図書館に接したときでした。そこには論文や書籍をはじめ、あらゆる情報が網羅的に系統的に、そして検索可能なかたちで集められ整理され、早朝から深夜まで常時自由に利用できるかたちで提供されていました。カードやマイクロフィッシュにより整理されていましたが、後から考えてみれば、情報取り扱いの基本方法はコンピュータ化された現代と変わるところはありません。とくに **Humanities and Social Sciences Index** をはじめとする「インデックス」と呼ばれる情報源は、留学前の日本の人文社会科学では使われていません

でしたので、その強力さと便利さには、徒歩で旅するのと飛行機で旅行するくらいの違いを感じました。

博士論文を書く1980年になってはじめて、コンピュータに接しました。私自身は人類学者ですので、ラテンアメリカの農村での長期の現地調査に基づいて論文を書いており計算処理には無縁でしたが、計算機で博士論文の編集をしようとする学生には助成を出すという通知が大学からありましたので、コンピュータというもので何ができるのか知っておくのもよい、くらいのつもりで使い始めました。スタンフォード大学最先端のコンピュータ・サイエンスや工学や天文学など大規模な高速計算を担っていた超新鋭大型計算機に、論文のテキスト編集という些細な仕事をしていただいたわけです。大型計算機のターミナルの数は限られていましたし、優先順位の低いジョブは昼間には制限されていましたから、夕食後に計算機センターに出かけ、あいているターミナルを探して昼間に書いた原稿を入力し明け方まで編集するという毎日でした。

このとき以来、コンピュータは私にとって不可欠なものとなりました。

日本に帰ると8ビットのパソコンが出始めた頃で、長い文章の中に一字を挿入するとその処理に数秒から数十秒は待たなければなりませんでした。それでも効率的でした。16ビットのパソコンの時代になって、処理速度は感激的に向上しました。現在では常時携帯のPCがほとんど身体の一部として私の頭

の増設メモリとなり、資料庫となり、24時間のコミュニケーション手段となり、有能な秘書となっています。

しかしこのような変化によって、よいことばかりがもたらされたわけではありません。

博士論文の期限も近い日の明け方に、満室の大型計算機センターで静かにキーボードの音だけが響くなかで突然押し殺したうめき声があがり、長身痩躯で眼鏡をかけた男子学生が汚い言葉で一人ののしり始めたことがありました。ターミナルのディスプレイに対する罵詈雑言は数十分も続いたと思います。明らかにデータが失われたようでした。その学生が学位論文を提出できたかどうかはわかりません。私にとって、エラーの恐ろしさ、バックアップの重要性、そして電子情報への依存がもたらす新たなリスクを知る原点でした。

データ複製、再生、ミラーリングなどが発達し、この種の問題が起きる可能性は減少しています。しかしその他のリスクや危険は種類も量も拡大しまし

た。情報が現在のようなかたちで扱える手段となったことによって、予期されない目的のためにも使われるようになりました。以前には概念自体が存在しなかった種類の情報暴力や不法行為も生まれ、これについては社会の側の対応が常に後手にまわっている現状です。

それでもこうした負の副産物は、情報がもたらす便益とは比較すべくもありません。ディスプレイあるいはスクリーンの向こう側で起こる情報科学の発展はあらゆる分野に広がり、ほとんど無限の可能性を秘めているように私には思えます。そうした可能性をどのように生かすことができるか、可能性の実現によりスクリーンのこちら側で解き放たれることになる法的、社会学的、心理学的問題にどのように対処するかは、人間に関わるものであるだけに解決が難しいのだと思います。人間科学の問題かもしれません。